

兵庫県こころのケアセンター 平成28年度実施分に係る
外部評価委員会 事業評価

評価対象事業	評価	所 見
研修事業	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講者のニーズに対応した内容や参加しやすい時期の配慮により、目標500人以上に対し686人の受講があり、受講生の満足度も高いレベルを維持している。 ・ 県外受講者の構成比率は44.2%と昨年と同レベルを確保し、「こころのケア」の全国拠点施設としての指導的役割も果たしている。 ・ 特別研修は、当センターでこそ実施できる研修として、今後も継続して実施されることが期待されるとともに、自主財源の確保にもつながっていることが評価できる。
情報の収集 発信・普及 啓発事業	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 熊本地震をテーマに「こころのケアシンポジウム」を開催したことは、時宜を得たテーマであり、被災地支援の経験の豊富な当センターが催すのに、ふさわしい有益なものであった。また、行政関係者、医療関係者等、約100名の参加者から高い評価を得ている。 ・ ホームページについて、「子どものこころのケア」に係るページの充実などに取り組み、年間目標（36,000件）を大幅に上回るアクセス数(111,827件)を獲得しており、本事業の1次目標である「「こころのケア」に関する情報の発信及び普及啓発」を行っていると評価できる。 ・ なお、ホームページの内容について専門職向けのもが多く、一般住民向け、特に、児童期思春期の精神疾患を抱える子どもの家族も利用し易い掲載方法についても検討を要する。
連携・交流 事業	S	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成28年4月14日発災した熊本地震において、「ひょうごDPAT」として職員を現地に派遣し支援活動を行うとともに、その後もコンサルテーションや講師派遣などで技術的支援を行う等、当センターの専門的知見をもって被災地を積極的に支援しようとする姿勢は高く評価できる。 ・ これら被災地支援活動は今後の「ひょうごDPAT」の運営を如何に行っていくか等、多くの教訓が得られていることから、経験を体系的に整理し、今後のDPAT研修会等に生かしていくことが望まれる。 ・ 関係機関と連携調整を継続し、社会的に有用性の高い、独自の活動を積み重ねており、今後とも引き続き有用な連携が展開されることが期待される。
相談事業	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ トラウマ・PTSD相談の割合が約7割前後で推移し、地域の相談機関や医療機関からの相談や紹介も定着してきており、「こころのケアセンター」の専門性とその役割が広く認識されてきているものと評価できる。 ・ 長年の相談技術の蓄積により、関係機関からも信頼を得ており、今後、さらなる技術の向上に努めていただきたい。

評価対象事業	評価	所見
附属診療所の運営	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ H28年度の受診者は、2,737人と昨年（2,746人）に引き続き年間計画（3,000人）には数値的に到達していないが、初診者数が増加し、子どものトラウマに関する受診割合が高くなっており、社会的なニーズに応えると評価でき、今後もトラウマ・PTSDの専門治療機関として担うべき役割が期待される。 ・ 目標達成を目指すに当たり、過去の未達成であった実績の原因分析により受診者増に向けた対策をどのようにとられたかが重要である一方、必要に応じて目標数値の変更も検討すべきである。
ヒューマンケアアカレッジ事業（音楽療法士養成講座）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽療法の普及が望まれる中、音楽療法士の育成が課題とされるが、音楽療法士補の目標数を達成しているところは評価できる。 ・ しかし、講座修了者数が減少傾向にあるため、さらに音楽療法の有益性の認知度を向上させるための啓蒙活動や講座運営、指導内容の充実など、より実践的、かつ優秀な音楽療法士の養成に取り組むことを期待する。
ヒューマンケアアカレッジ事業（実践普及講座）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講者数としての目標値150名に対し、実績値144名と数値的に達成していないが、89%（目標85%）の受講者が有益と回答するなど、一定の質は保たれている。 ・ ターミナルケア、グリーフケアともに、通常関心を持たれにくい重要なことであり、当センターならではの取り組みである。また、アートとこころのケア講座は、芸術を介在させたケア方法として、意義深く、さまざまな分野で取り入れられることを期待する。 ・ こころのケアセンターの使命において如何なる講座が重要か戦略的に考え、テーマの選定を含めて今後も検討を行うことが必要である。
安定的な運営のための収支バランスの確保等	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経費削減に努めるとともに自主財源の確保を行うことで、黒字を達成したことは評価できる。 ・ 外部評価委員会からの意見を取り入れ、事務執行における改善に取り組んでいる。
研究調査に係る総合的な評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 短期研究は、「災害支援」、「複雑性悲嘆」、「発達障害とトラウマ」の3題で、「災害支援」の中長期の支援についての課題分析は当センターの実践活動に参考になる。「複雑性悲嘆」は長期予後の課題を明らかにした。「発達障害とトラウマ」は今後も継続研究することを期待する。 ・ 長期研究は、3ヶ年計画の1年目となり、「大規模交通災害」、「災害救援組織のメンタルヘルス」、「子どものトラウマアセスメント」、「職場のハラスメント」の4つの多彩なテーマに取り組んでおり、次年度以降の展開が期待される。 ・ 競争的資金による研究は5テーマで、多額の外部資金を獲得していることは、当センターが高く評価されていることをあらわしている。

(評価基準)

S：年度計画を大きく上回り、中期計画を十分達し得る優れた業績を上げている。

A：年度計画どおり、中期計画を十分達し得る可能性が高い。

B：年度計画どおりと言えない面もあるが、工夫もしくは努力によって中期計画を達成し得る。

F：年度計画を大きく下回っている、又は中期計画を達成し得ない可能性が高い。